神戸市の街路空間における沿道住民による「勝手花壇」の実態と住民意識に関する研究

A Study of Flower Planting by People along a Road and their Awareness of it in Kobe City, Western Japan

長沼 真美* 上甫木昭春**

Mami NAGANUMA Akiharu KAMIHOGI

Abstract : This study aimed to clarify of “KATTE-KADAN” as activities grown the green by people living along the road in Kobe and resident's view of it, and the way to improve the landscape of the road for using green planted by residents. We grasp the activity from the appearance, the state and the substance of it. On one hand, we grasp people's view from the duration, the influence and the effect of it. The results show that they have been this activity for a long time and will continue for the future. The activity is momentary as mainly of a grass and flower, and of potted. From the investigation of consciousness, “KATTE-KADAN” activity effects as regional landscape and community with the people on the road while some problems as interrupt or temporary activity is clarified. So to make more regional surrounding of use it, I suggest the new partnership between public activity and private activity to establish a role of use or management and maintain the basis to plant.

Keywords: KATTE-KADAN, participation of people, roadside space, landscape, community

キーワード: 勝手花壇, 住民参加, 街路空間, 街並み景観, コミュニティ

はじめに

今日、緑豊かなよりよい住環境を形成していく上で、街路の持つオープンスペース機能としての景観形成や生態系ネットワークの形成に、街路緑化の果たす役割は大きい¹⁾。

このような街路緑化では、これまで行政による整備・管理が実施されているが、市民参加による植栽管理の事例も多くなり、そのあり方について数多くの問題点が指摘されている²⁾。神戸市では、この問題に関して早くから関心を示し、「市民花壇」「緑と花の市民協定」といった各種制度を用いて、グループ・団体の住民参加を推進する緑化活動の仕組みづくりを行っており、組織化された住民参加の実態及び効果については幾つかの研究が見られる^{3,4)}。

しかし実際には、組織化された住民による緑化活動よりも、住民が住居前の街路空間において、違法行為に当たるものの、個人的に緑化空間として利用している事例は、以前から多く確認されている^{5,6)}。多くの市町村において、これらの個人による多様な緑化活動は、統制が難しく、黙認しているのが実情であり、個人による活動を公的な場で認可できる制度はなく、方向性さえも定まていないのが現状である。その中で、神戸市では、植樹柵環境の実態調査の際に、植樹柵へ住民が勝手に植栽している活動を調査し、植樹柵ごとに活動の有無が報告されている。この報告書の中で、植樹柵内での住民による緑化活動は「勝手花壇」と称されている⁷⁾。伏木ら⁸⁾は、街路上での園芸活動の分布について勝手花壇を捉えているが、活動の具体的内容や住民意識については明らかになっていない。

そこで本論文では、地域住民による緑化管理活動のあり方と、自治体との一定のルールに基づいた、街路環境形成への活用の方方向性を探るために、神戸市における「勝手花壇」の実態と「勝手花壇」に対する住民の意識特性を明らかにすることを目的とした。

1. 研究方法

(1) 調査対象路線の設定

本研究は、神戸市が平成 13 年 5 月に行なった「植樹柵・植樹帯の市民による管理の実態」⁹⁾を基に、神戸市東部建設事務所管内の灘区・東灘区において、連続した活動が確認された、図 1 に示す 13 路線を調査対象路線とした。なお、本研究では、活動主体が個人である活動を調査対象とし、自治会などの団体により管理されているものについては、調査対象外とした。また、出現路線内において本来は植樹柵が整備されていないにもかかわらず、歩車道境界部に同様に出現している活動については、植樹柵を自主的に設置している例なども見られることから、勝手花壇と同様に扱うものとした。

(2) 実態調査及び解析方法

調査対象路線の環境特性は、表 1 に示す道路構造、用途地域、

図-1 調査対象路線

* (株)ダイヤモンドシティ **大阪府立大学大学院農学生命科学研究科

図－2 勝手花壇の現状事例

立地特性から把握した。調査対象路線の両側沿道の用途地域については、街路に接する延長から構成割合を求めた。

図2に示すような勝手花壇の現地調査における調査項目は、発生位置、植樹枿の改変（レンガやブロックによる段差の設置など）、活動実施範囲、歩道縦断方向への延長（以下「延長」と呼ぶ）、歩道横断方向への植樹枿からのみ出し幅（以下「はみ出し幅」と呼ぶ）、活動内容（植樹枿内の地植え活動、植樹枿および周辺での鉢植え活動—いずれの活動も草本種と木本種に分けて調査）とした。なお本研究では、本来公的に管理すべき歩車道境界部に位置する植樹枿および植樹帯付近の私的緑化活動を「勝手花壇」と定義しており、実態調査では歩車道境界部に限定して発生位置を確認した。

現地調査での結果（13区間 224箇所の勝手花壇）を、路線別、歩道幅員別に解析した。勝手花壇の発生頻度は、区間の延長と発生箇所数から100mあたりの発生箇所数とした。活動範囲については、延長、はみ出し幅の平均値による比較を行なった。活動内容については、地植え活動では植樹枿内での草本種と木本種の地表面の占有率を目視により測定し、鉢植えでは植樹枿および周辺

表－1 調査対象路線の環境特性

路線名	道路構造				用途地域(両側沿道の構成割合:%)					立地特性
	路線延長(m)	歩道幅員(m)	植樹枿面積(m ²)	街路樹種	1住	2住	1中	近	準工	
青谷川左岸線	611	4.0	15.8	ヤナギ	—	50.0	50.0	—	—	片側に王子公園が立地しており、緩やかな勾配がある。
岩屋線	292	5.0	1.5	シンジュ	84.8	—	—	15.2	—	北側を阪急電鉄神戸線の高架に、南側をJR 東海道本線に区切られている。沿道には4～7階建てのマンションや空地がみられる。
国魂線	383	4.0	7.2	イチヨウ	84.9	—	—	15.1	—	北側に幹線道路が走っており、路線も未だに貫通していない。南部にも養護停車場線があり、線路の横断ができず整備途中である。
将軍通線	1519	5.0	16.0	プラタナス	78.6	—	—	13.5	8.0	南北方向に整備されており、延長の長い植樹帯や敷地規模の大きい4～5階建てのマンションや駐車場などの空地が見られる。
神若線1	536	4.0	1.9	イチヨウ	87.6	—	—	12.4	—	路線の西部を阪急電鉄神戸線の効果で区切られており、養護に近い場所に位置する。
神若線2	1120	4.0	5.7	イチヨウ	100.0	—	—	—	—	中央部に都賀川が縦断して流れており、マンション及び空地といった環境が一部見られる。
西瀬原田線	323	4.0	2.5	トウカエデ	22.0	—	—	78.0	—	養護前に位置しており、路線西部を阪急電鉄神戸線の高架で区切られている。また、養護前では3つの市民花壇が行なわれており、うち1つは路線中央部の歩道上で行なわれている。路線の中央部には7～8階建てのマンションが立地している。
瀬駅前線	267	4.0	4.0	シンジュ	—	—	—	100.0	—	沿道には商業系の建物が並び、駅前で人通りの多いところに位置している。路線南部の東側には、工場が立地している。
瀬北線	305	4.0	6.2	シンジュ	100.0	—	—	—	—	片側にJRの駐車場があり、視界の開けたところに位置する。踏み切りや高架などがなく、線路の反対側の地区からの侵入が無く、路線も貫通していないことから車の交通量は少なくなっている。
魚崎幹線	448	4.5	11.4	イチヨウ	—	—	—	100.0	—	南北方向に伸びる幹線道路であり、交通量も多い路線となっている。南側は高低差のある地形であり、車道と歩道とに高い段差がある。
鳴尾御影線1	596	3.5	1.0	ユリノキ	64.4	—	35.6	—	—	路線の西部が阪神電車の高架で区切られたところに位置する。路線の中央部には4～5階建てのマンションや、広大な空地などが立地している。
鳴尾御影線2	549	3.0	4.5	ユリノキ	15.2	—	72.3	12.5	—	西部を住吉川、東部を魚崎幹線で区切られたところに位置する。沿道にはマンションが多く立地している。
鳴尾御影線3	119	3.0	1.6	ユリノキ	—	—	100.0	—	—	神戸市の最東部に位置し、芦屋市に隣接している。
全体	7068	—	—	—	59.4	4.3	14.6	19.9	1.7	

(凡例) 1住：第1種住居地域 2住：第2種住居地域 1中：第1種中高層住居専用地域 近：近隣商業地域 準工：準工業地域

での草本種と木本種の鉢植え個数を測定し、それぞれ平均値による比較を行なった。また、地植え活動・鉢植え活動における木本種の構成割合から、活動内容の持続性の高低を4タイプ（A～D）に分類した。

(3) アンケート調査および解析方法

「勝手花壇」に関する意識特性は、アンケート調査により把握した。アンケート調査は、平成13年10月上旬に、対象区間に隣接する、集合住宅を含む全ての住戸647軒に直接配布し、10月下旬に郵送で回収する留め置き方式により行なった。集合住宅については、1戸につき1票を管理人、もしくは街路に近い1階の住人に配布した。有効回収数は、計114票、有効回答率は17.6%であった。なお、本調査が本来違法行為である調査内容を含んでおり、結果として有効回収率が低かったことより、回答者の属性が私的な緑化により積極的な人々に偏り、アンケートの調査結果に偏りを含んでいることが懸念される。

アンケートの設問は、まず勝手活動の実施の有無を設問し、勝手花壇を行なっている住民への設問と、勝手花壇を行っていない住民も含めた全住民への設問で構成した。勝手花壇を行なっている住民については、活動の実施年数・活動の継続に関する意志、継続するために必要な整備内容といった設問から勝手花壇の活動実態を捉えた。勝手花壇を継続する上で必要な整備内容については、住民の意識要求をより正確に捉えるため、必要と思われる項目全てを選択してもらうと同時に、その中でも最も活動継続にとって必要と思われる1項目を選択するよう求めた。活動がもたらす周辺環境への影響（図6に示す項目）および活動に伴う効果（図7に示す項目）については、すべての住民に設問した。影響および効果の解析では、各評価項目の3段階評価尺度で、以下のように評価点を与えた。影響については街路上で活動を行なっている住民に対して「配慮していない～どちらともいえない～配慮している」、街路上で活動を行っていない住民に対して「配慮していると思えない～どちらともいえない～配慮していると思える」にそれぞれ-1～1点の評価点を与えた。効果については全住民に対して「効果があった～どちらともいえない～効果がなかった」にそれぞれ-1～1点の評価点を与えた。

影響および効果については、活動タイプ別（勝手花壇を行なっている住民（以下「勝手花壇のみ」と呼ぶ）、自宅前での園芸活動を行なっている住民（以下「軒先園芸のみ」）、勝手花壇と自宅前での園芸活動をあわせて行なっている住民（以下「勝手花壇+軒先園芸」）、活動を行っていない住民（以下「活動無」と呼ぶ）の4タイプ）に平均評価点を算出し、比較した。

2. 勝手花壇の実態調査結果

調査対象路線の環境特性を表1に、路線別および幅員別での勝手花壇の出現状況の平均値を表2に示す。

(1) 調査対象路線の環境特性

路線別での区間延長は、全体では合計7068mとなっている。路線別では將軍通線で1519mと最も長く、鳴尾御影線3で119mと最も短くなっている。沿道の用途地域については、第1種住居地域が全体の沿道長の59.4%と多くを、次に近隣商業地域が19.9%を占めている。また、街路樹種については、共通の樹種を用いて整備されている路線として、イチョウを用いている4路線、ユリノキを用いている3路線が見られた。植樹枿面積については、全体では平均7.6㎡であるが、路線別で見ると青谷川左岸線の15.8㎡から鳴尾御影線1の1.0㎡まで、大きく異なっている。歩道幅員については、幅員が4.0mの路線が7路線出現しており、1mごとに歩道幅員を分類すると「4m以上5m未満」の構成比が56.3%と多くなっている。

(2) 勝手花壇の出現状況

勝手花壇の平均発生頻度は、全体では平均3.2箇所/100mとなっており、29.5%の植樹枿において、ブロック・レンガ等を用いて植え枿の周辺を囲い、歩道面と数十cmの段差をつけて植栽土壌を確保するなどの改変が行なわれている。路線別での発生頻度を捉えると、発生頻度の高い路線は灘駅前線で7.5箇所/100m、次いで神若線1、鳴尾御影線3で5.0箇所/100mとなっている。一方、発生頻度の低い路線は青谷川左岸線と魚崎幹線で、2.0箇所/100mとなっている。発生頻度が高い灘駅前線では植樹枿の改変度は70.0%、神若線1では77.8%、鳴尾御影線3では83.3%と、発生頻度が高い路線において、植樹枿の改変度も高くなっている。一

表-2 勝手花壇の実態調査結果

		出現状況		活動実施範囲		活動内容			
		発生頻度 (箇所/100m)	植樹枿改変度 (%)	活動延長 (m)	はみ出し幅 (m)	地植え面積占有率		鉢植え個数	
路線名	青谷川左岸線	2.0	0.0	8.5	1.0	35.3	23.8	5.8	1.0
	岩屋線	2.7	12.5	1.9	0.2	44.4	16.3	0.3	0.1
	国魂線	4.2	0.0	7.7	0.8	28.5	12.0	16.0	1.9
	將軍通線	3.0	15.2	7.1	0.6	12.7	15.2	14.5	3.5
	神若線1	5.0	77.8	2.7	0.6	44.1	22.5	9.6	4.6
	神若線2	2.6	13.8	5.2	0.6	22.0	11.1	5.4	1.5
	西灘原田線	4.0	30.8	2.8	0.3	27.9	11.3	8.6	4.2
	灘駅前線	7.5	70.0	2.4	0.2	53.1	22.8	0.4	0.2
	灘北線	2.3	28.6	6.7	0.9	20.7	42.9	18.7	9.7
	魚崎幹線	2.0	11.1	7.4	0.3	14.4	38.8	10.6	2.2
	鳴尾御影線1	2.7	18.8	4.2	0.4	40.0	7.1	7.9	2.8
	鳴尾御影線2	2.7	26.7	3.2	0.5	25.6	18.8	3.7	2.1
	鳴尾御影線3	5.0	83.3	2.0	0.2	37.5	35.8	1.2	0.0
歩道幅員	3m以上4m未満	2.9	32.4	3.5	0.4	29.7	20.2	5.1	2.1
	4m以上5m未満	3.3	34.6	4.9	0.6	29.3	21.2	8.1	2.6
	5m以上6m未満	3.0	14.8	6.3	0.6	13.1	15.2	12.4	3.0
全路線		3.2	29.5	5.0	0.5	21.9	18.5	8.7	2.6

表－3 活動内容の持続性の分類

分類		地植え木本占有面積比	鉢植え木本個数比	勝手花壇活動数 (箇所)	構成比 (%)
活動の 持続性	大 ↑	タイプA	50%以上	27	12.1
		タイプB	50%以上	40	17.9
		タイプC	50%未満	58	26.0
	小 ↓	タイプD	50%未満	98	43.9
総計				223	100.0

方で植樹柵の改変が見られない路線も2路線確認された。

また、将軍通線・神若線・西灘原田線・鳴尾御影線1・鳴尾御影線2などの路線の中高層マンションおよび空地の前面の歩道部では、勝手花壇の発生頻度は低くなっていることが確認された。

なお、自治会により、マンション前面の歩道上に市民花壇プランターの設置が行われている西灘原田線では、マンション前面部の植樹柵内においても個人活動である勝手花壇活動が確認された。

歩道幅員別から発生頻度を捉えると、「3 m以上4 m未満」で2.9箇所/100m、「4 m以上5 m未満」で3.3箇所/100m、「5 m以上6 m未満」で3.0箇所/100mと、発生頻度については、歩道幅員での差が見られない。一方で、植樹柵改変度については、「3 m以上4 m未満」で32.4%、「4 m以上5 m未満」で34.6%であるのに対して、「5 m以上6 m未満」で14.8%と低くなっている。

(3) 勝手花壇の活動実施範囲

1箇所あたりの活動延長は、全体では平均5.0mではあるが、路線別で見ると青谷川左岸線で8.5m、岩屋線で1.9mと、路線ごとに延長は大きく異なっている。はみ出し幅について、全体では0.5mとなっているが、青谷川左岸線で1.0m、灘北線で0.9mとはみ出しの大きい路線も見られた。

歩道幅員別で活動延長を見ると、「3 m以上4 m未満」で3.5m、「4 m以上5 m未満」で4.9m、「5 m以上6 m未満」で6.3mと幅員が広いほど、活動延長も長くなっている。歩道幅員別でのみ出し幅は、「3 m以上4 m未満」で0.4m、「4 m以上5 m未満」で0.6m、「5 m以上6 m未満」で0.6mと「3 m以上4 m未満」ではみ出しが、やや抑制されていることがわかった。

(4) 勝手花壇の活動内容

植樹柵内における地植え植栽活動について、全体平均では植樹柵面積の21.9%を草本種が、18.5%を木本種が占有していることがわかった。路線別では、11路線において草本種の占有率が大きくなっているが、路線が貫通していない灘北線や植樹柵に当初から段差が設けられている魚崎幹線など、歩行者通行による影響の少ない路線においては、木本種の占有率が大きくなっている。鉢植え個数については、全体でみると草本種が平均8.7個/箇所と木本種2.6個/箇所よりも多く出現している。路線別についても、全路線において草本種が多く設置されている。

地植え面積について歩道幅員別で捉えると、草本種・木本種あわせた占有率について、「5 m以上6 m未満」では28.3%と低いものの、草本種・木本種合わせると「3 m以上4 m未満」では植樹柵の49.9%、「4 m以上5 m未満」では50.5%と高くなっている。

鉢植えの設置個数については、歩道幅員が広がるほど、設置個数が多くなり、特に草本種において3 m以上4 m未満で5.1個、4 m以上5 m未満で8.1個、5 m以上6 m未満で12.4個と木本種よりもその傾向が強く見られた。

表3に地植え植栽占有比と鉢植え個数比から活動内容を分類し

図－3 勝手花壇活動の実施年数

図－4 勝手花壇活動の継続意志

図－5 勝手花壇を継続する上で必要な整備

た、勝手花壇の活動内容特性を示す。地植え、鉢植えともに木本種選択割合が多く永続性が高いと考えられるタイプAは27箇所(12.1%)と少なく、地植え、鉢植えともに木本種選択割合が少なく永続性が低いと考えられるタイプDが98箇所(43.9%)と多くなっている。

3. 勝手花壇に対するアンケート調査結果

(1) 勝手花壇の実態について

アンケート調査の結果、「勝手花壇のみ」が15票(13.6%)、「軒先園芸」23票(20.9%)、「勝手花壇+軒先園芸」41票(37.3%)、「活動無」31票(28.2%)の回答(計110)が得られた。

勝手花壇を実施している居住者(56軒)の実施年数(図3参照)については、「1～5年」と「6～10年」が29.9%と高くなっている。一方、「21～40年」についても、19.4%と高く、全体の62.7%が6年以上と長期的に活動が行なわれている様子がみられた。勝手花壇の継続意志(図4参照)については、「現状のまま」が66.7%と最も高く、「現状より広げたい」が28.6%と高くなっている。

勝手花壇を継続する上で必要とする整備(図5参照)については、「街路上の植え枿などの植栽基盤に関する環境整備」が35.3%と最も高く、また全体の27.9%が全項目の中で最も必要と答えている。また、「苗木または草花の助成など」が29.4%、「街路上で自由に活動できるような許可や協定」が23.5%とそれぞれ高くなっている。

(2) 勝手花壇による周辺環境への影響

周辺環境への影響(図6参照)について、通行障害への配慮は「勝手花壇+軒先園芸」で平均評価点(0.8)、「軒先園芸のみ」(0.8)、「勝手花壇のみ」(0.7)で高くなっている。一方、「活動無し」(-0.3)と低くなっていることがわかった。害虫の発生に対する配慮については「軒先園芸のみ」(0.2)、「勝手花壇+軒先園芸」(0.2)でやや高く、「活動無し」(-0.2)で低くなっている。街並み景観に対する配慮については、4タイプともに0.2以上と高くなっているが、生態系の攪乱については「勝手花壇+軒先園芸」「勝手花壇のみ」「軒先園芸のみ」の3タイプで-0.1以下と低くなっている。

(3) 勝手花壇に伴う効果

勝手花壇に伴う効果(図7参照)については、全タイプにおいて評価が高く、中でも「季節変化を感じるようになった」は住民全体で平均評価得点0.7と高い効果が現れている。活動タイプ別に見ると、「勝手花壇+軒先園芸」が全ての項目について、最も高い効果を感じており、積極的に園芸活動を行なっていることで、得られる効果が高くなっているものと思われる。また、「通行人との会話や挨拶が増えた」では「勝手花壇+軒先園芸」(0.6)・「勝手花壇のみ」(0.5)で評価が高く、「街並みの景観がよくなった」では「勝手花壇+軒先園芸」(0.6)・「勝手花壇のみ」(0.5)で評価が高くなっており、勝手花壇を行なっている住民に、通行人とのコミュニケーションや街並み景観に対して効果が高くなっていることがわかった。

4. 勝手花壇の出現特性の考察

以上の結果より、勝手花壇活動は全体の62.7%で6年以上と長期間継続して行なわれており、出現路線ごとに特徴をもった活動となっていることがわかった。周辺環境との関係性では、多くの路線で中高層マンション・空地といった前面部では活動は見られず、沿道の土地利用状況が活動に影響していると類推される。また、沿道の用途地域は、第一種住居地域が多く、主には戸建て住宅前でなされている活動であることがわかった。

しかし、一方で市民花壇など住民主体による活動が盛んに行な

われている西灘原田線などでは、マンション前面の歩道部においても活動が行なわれており、住民活動の公的な推進も活動に影響を与えていると考えられる。

活動の現状としては、住民は自ら植樹枿の改変を行ない、活動場所を確保していることが確認された。植樹枿の改変は、「5m以上6m未満」の歩道幅員において改変度が低く、歩道幅員の影響が見られた。これは、歩道幅員が広いことで、歩行者がすれ違う際などに植樹枿内へ侵入する可能性が低いことおよび、「5m以上6m未満」の歩道幅員において植樹枿面積が広いことにより、植樹枿改変の必要がなかったことが考えられる。活動範囲をみると、はみ出し幅は平均0.5mであるが、路線別では1.0mと大きい路線も見られる。通行障害への影響についてのアンケート調査結

図-6 周辺環境への影響に対する評価

図-7 勝手花壇に伴う効果に対する評価

果からみると、活動を行なっている住民は、通行障害に配慮しながら活動を継続しているとしながらも、活動を行っていない住民には、通行障害要素としての認識が高く、歩行者との軋轢が大きい状況にあるといえる。

活動内容をみると、勝手花壇の行なわれている植樹枿内では、地植えの占有面積が高く、この傾向は特に「3m以上4m未満」「4m以上5m未満」の幅員で見られ、「5m以上6m未満」の広い歩道幅員では活動の占有率がやや低くなる傾向が見られた。これは、「5m以上6m未満」の活動において、植樹枿面積が広がっていることが原因と考えられる。鉢植え活動については、歩道幅員が広がるほど設置個数も増加していることから、空間性に左右される活動であり、この傾向は特に草本種において強い傾向にあった。

樹種の構成については、表3のタイプ別での構成割合を見ると、地植えや木本種を主体とする永続的な活動（タイプA）ほど出現箇所数が少なく、鉢植えや草本種を主体とする仮設的な活動（タイプD）ほど出現箇所数が多い傾向にあった。また図4の結果について住民に活動への継続志向が見られるにもかかわらず、木本種に比べ手間がかかるとされる草本種が多く選択されていることは、歩道空間という利用上の制限により安定した活動を行なえないという理由が、考えられるが、神戸市では街路樹管理の際には、個人植栽活動を阻害しないよう配慮するなど、物理的な規制は行っていない。すなわち勝手花壇活動には、住民の自己規制と同時に、緑量を確保するために活動を行なっているという意味合いよりも、管理・育成など園芸活動そのものへの楽しみに対する欲求が強く現れているという一面もあると考えられる。

勝手花壇のもつ効果として、「季節変化を感じるようになった」については、表3のすべてのタイプの住民において、活動による影響としてよくなっていると感じている。特に、勝手花壇と軒先園芸をあわせて行なっている住民は、活動による多様な効果を高く感じており、積極的に園芸活動を行なうことで、得られる効果が高くなっていることが伺える。また、「勝手花壇+軒先園芸」や「勝手花壇のみ」といった、勝手花壇を行なっている住民に、「通行人との会話や挨拶が増えた」「街並みの景観がよくなった」といった傾向が見られたことにより、勝手花壇活動により、コミュニティ形成や景観形成といった公的な効果が得られていることが認識できた。

勝手花壇の活動については、今後も活動を継続していく意志が見られた。安定した活動を確保するという意味においても、植栽基盤に対する環境整備への要求が特に強く見られ、同時に助成制度や許可・協定などといった、制度整備への要求の存在も確認でき、公的な整備が求められていることが伺えた。

5. まとめ

勝手花壇は、近隣住民や通行人との会話などに効果が見られるように、近隣コミュニティを形成する、身近な都市緑化活動であるといえる。しかし本研究において、勝手花壇の通行帯へのみ出しが多く確認され、活動を行なっていない住民へのアンケート結果からは通行障害要素としての問題点もみられた。また、活動の実態としては、地植え・木本種に比べると鉢植え・草本種が主体となった仮設的なものであり、緑化活動として安定してはいないものの、活動の継続を望んでいる住民の声も多く確認された。活動については、個人の美観に基づくものであり、街路景観の統

一の方策を検討する必要についても考えられる。しかし本アンケート調査のように、勝手花壇の出現に伴い街並み景観がよくなったとする結果もみられ、住民による景観形成が街路景観形成において有用に働く可能性が示された。

以上の結果を基に、今後勝手花壇を活用した緑豊かな景観形成を行なう方策として、街路の通行性能を確保し、ルールに基づいた活動をサポートしていくことなどを検討する必要があると考えられる。

通行性能については、吉牟田徹ら¹⁰⁾の研究により、歩道上において通行目的として90%の歩行者が実際に利用している幅員^{注1)}が明らかとなっている。今後、植栽基盤整備を行なっていく際、これらの通行幅員を確保したうえで、歩道上に勝手花壇活動への活用スペースの確保を検討していく必要がある。その際、現地調査にて多く確認された植樹枿改変は、植栽の基盤土壌の確保と活動スペースを物理的に保護することを目的として行なわれているものと考えられ、活動スペースの確保に当たっては、植樹枿への段差や侵入防止柵の設置などを検討すべきであるといえる。

また、勝手花壇の街路環境形成への活用を具現化するためには、歩道面から立ち上がりのある植栽スペースの確保と言った植栽基盤に対する環境整備や、助成制度、許可・協定などといった、公的な援助が必要である。今後の方策としては、新たな制度として、勝手花壇を行なう意志のある住民に対して、街路空間の利用・管理上のルールを協定で結び、それに対応した植栽基盤整備を行なうなど、新たなパートナーシップの仕組みを検討していくことが必要であると考えられる。

参考文献

- 1) 亀山章 (2000)：街路樹の緑化工－環境デザインと管理技術－：(株)ソフトサイエンス社
- 2) (財)都市緑化技術開発機構 (2000)：都市のエコロジカルネットワーク－人と自然が共生する次世代都市づくりガイド－：(株)ぎょうせい
- 3) 島尾勝 (1993)：住民参加による緑化活動の組織化に関する研究：造園雑誌 56(5), 337-349
- 4) 真鍋千恵子 (1998)：事例報告 7 下町の緑 下町の緑の実態と効用～街と人とを緑がつなぐ：ランドスケープ研究 62(1), 42-44
- 5) 平田富士男 (2001)：花と緑のまちづくり指導者養成講座終了後の受講生に対する参加促進方策とその効果：ランドスケープ研究 64(5), 845-848
- 6) 赤澤宏樹 (1998)：住宅密集市街地における空間構造と空間認知のかかわりに関する研究：ランドスケープ研究 61(5), 705-710
- 7) 神戸市建設局公園砂防部 (2000)：街路樹調査報告書
- 8) 伏木亜紀 (2001)：都市における「勝手花壇」の設置特性に関する研究～神戸市灘区を事例として～：大阪大学卒業論文
- 9) 神戸市建設局東部建設事務所 (2001)：「植栽枿・植栽帯の市民による管理の実態」調査報告書
- 10) 吉牟田徹 (1988)：通行特性から見た歩道形態に関する研究：造園雑誌 51(5), 239-244

注1) 通行目的として90%の歩行者が実際に利用している幅員は、歩道幅員3mで約2m、歩道幅員4mで約2.7m、5m幅員で約3.5mとなっている。